NTS物語

❸ ビジネスモデルの確立へ向けて（第19回）

3―1編集企画体制への道（2）

出版事業　②「資料集」を作る（上）

代表取締役　吉田　隆

●出版社の原点

私自身は、出版社の原点は“出会い”にあると考えている。それは著者との出会いであり、テーマとの出会いである。日ごろの自分のあり方や問題意識の有無が、その出会いの良し悪しを左右する。この原点、即ち著者あるいはテーマとの“より良い出会いを形にする”という理念を出版社が忘れなければ、出版にはまだ無限の可能性があると思う。前回は、私が出版社に入るきっかけとなったボクシングを引き合いに、出版事業にも共通する資質として“想像力”と“事業マインド”について述べた。今回からは、NTSにおける“本作り”の歴史を辿ると同時に、企画と編集に対する私なりの考えも述べてみたい。さて、私にとって本作りの出発点は“資料集作り”だった。今回は、足と感性を駆使して集めた情報を、自らの手で企画・編集して形にしていく本作りの原点を振り返る。

●続「ノートの秘密」

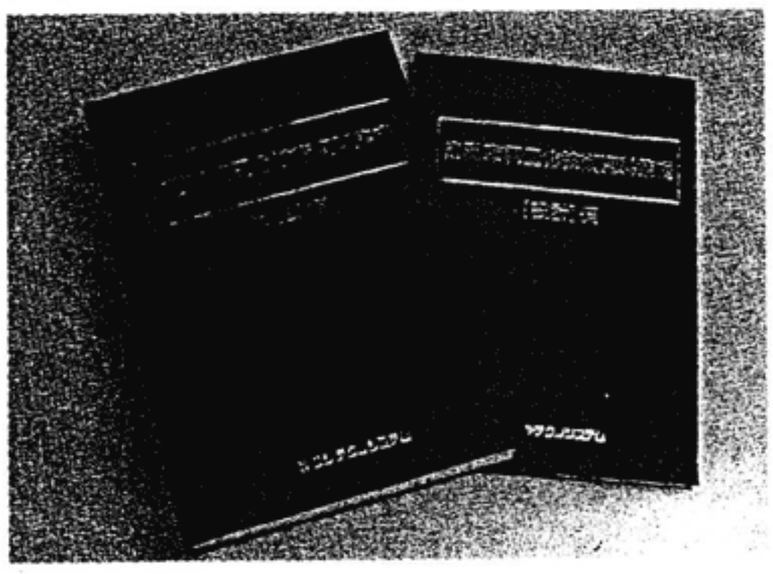
昭和54年2月に開催した私にとって初めてのセミナー「自動車の軽量化対策としての新設計及び新材料の適用」が出席者131名というヒットセミナーとなったことは、前に述べた（2002年7・8月合併号）。年明け早々からDM発送を開始し、参加者の数が100名の大台が見え始めた1月末頃、「このテーマは本にするぞ!」と小野社長の声がかかった。いよいよ本作りだ!と思わず緊張していると、「ノートを出せ」と指示が出た。ノートとは、以前「ノートの秘密」で述べた、あの大学ノートである。企業、業界団体、官公庁などの図書館で調べた専門誌や業界誌情報、および技術者、研究者へのインタビュー内容など、自動車軽量化情報で埋め尽くされた一冊だ。続いて、市販の情報分類用カードが手渡され、ノートの情報をカード1枚に1テーマずつ、重複を排除しつつ転記した結果、150枚ほどのカードに整理することができた。次に、そのカードを類似したテーマ毎にグループ分けすると、1グループ約10～20枚、7～8グループの束となった。各束に「プラスティック」、「鉄」、「非鉄金属」、「設計」、「総論」などとメモ書きして輪ゴムで止めた後、一束ごとに更にグループ分けすると、例えば「プラスティック」は「FRP」、「SMC」、「表面処理」、「成形加工」など数グループに分かれた。最初のグループを章、後のグループを節に見立て、レポート用紙にまとめると、「自動車軽量化」に関する7～8章、100節ほどの書籍の企画書が出来上がったのである。その企画書を携え、セミナーでお世話になった専門家、研究者の先生方を訪ね、企画構成に関する是々非々のアドバイスを受けた。さらに「プラスティック」だけは、技術進歩が著しく、領域が多岐にわたり、アドバイスだけでは限界があったため、編集委員会を持つことにした。こうして、私の本作り第1作である「自動車軽量化技術資料集成【材料編】」は昭和55年9月に完成した。続く「同【設計編】」は同年12月にでき上がった。材料編840頁、設計編285頁、計1125頁の大部は、企画から完成までに1年7ヶ月を要したのである。

●KJ法？

この資料集の制作技法は、小野社長のアイデアだった。彼が情報業界に入る前、大手スーパーのマーケティング部門で商品仕入担当として配属された際に学んだ「KJ法」からヒントを得たと聞いたことがある。KJ法とは、ご存知の方も多いだろうが、文化人類学者である川喜田二郎氏が考案した、大量の情報をカードに転記して整理・分析する創造性開発技法である。一冊のノートから本が生まれる過程は、新鮮で得がたい経験だった。私が入社当初、小野社長が机の上にカードを並べて整理する光景をしばしば目にしたものだが、私自身がこれまで手がけた10数冊の資料集の中で、カードを用いたのはこの時限りであった。

●「資料集」と「ハンドブック」

今になってふり返れば、「自動車軽量化」は日本の素材産業を総結集するほどの横断的テーマであり、書籍担当者が自ら企画、編集を担う「資料集」ではなく、その作業の多くを編集委員会に委ねる「ハンドブック」的書籍として取り組むべきテーマだったと思う。標準的な資料集は造本体裁A4版4～500頁、章節構成4～6章、20～40節、制作期間1年以内であるから、これと比較すると、この資料集は頁数といい期間といい規格外れの大仕事だった。しかし、情報出版業界が草創期から発展期に移行する昭和50年代半ばには、少なくともフジテクでは、「資料集」以外に「ハンドブック」を作るという発想は、まだ身に付いてはいなかった。編集委員会を持つという発想にしても同様である。本来、この業界は近代出版業界とは異なる素地の上に、「本ではなく情報を売る」という目的で生まれたといってよく、「資料集という本」でさえ、どちらかといえば新しい発想と捉えられていたのである。私の知る限り、この業界で「ハンドブック」をタイトルに冠した書籍が実現したのは、湯原浩三（九州大学教授）、関岡満（防衛大学校教授）の両氏（いずれも当時）が編集会議で提案されたのがきっかけで誕生した、私にとっての第3作目「地熱開発総合ハンドブック」ではなかったかと思うが、その話は後述したい。「自動車軽量化」以降、カードを利用する機会が一度もなかったのは、カードによる整理が必要なほど大量かつ境界領域的情報に関わるテーマの本作りが「ハンドブック」という新手法に移行したのと、特定テーマに係わる全30節程度の「資料集」作りなら「ノート」情報を直接整理するだけで十分だったからである。



◉今月の人事

【入社】 配送センター

◉定期検診

6月2日～26日の間に、定期健康診断を実施します。社員によって実施日が異なります。当日は朝食を摂らないで下さい。

◉編集後記

私は、インターネットでの検索を毎日のように行っています。紀伊國屋のホームページを見ました。すごい!あんなに詳しく出ているとは（感激!）会社のホームページももうすぐリニューアルされます。負けないように充実させて、情報をバンバン発信しましょう。（K）

◉編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

NTSニュース
2003年6月号（通巻52号）
2003年5月25日発行